



図1 『どっとねっと』のマイページ（個人ごとのトップページ）

クローズアップ③

北海道SNS『どっとねっと』の10年をふりかえって 地域SNSは人口減少社会に貢献できるか

（一財）北海道開発協会開発調査総合研究所所長 草薙 健

社会実験開始の背景

『どっとねっと』は、北海道開発協会の自主研究事業として、平成17年に北大情報科学系研究者の協力を得ながら着手した社会実験型プロジェクトで、人口が先細る北海道の地域のコミュニケーションをICTでどのようにカバーできるかを探るために開始した実証的な調査研究です。興味の核になるのは、SNSがソーシャル・キャピタル^{*1}を高め地域力の向上に寄与できるか、という点です。17年といえば、ちょうどmixi（ミクシイ）というSNSが登場し、飛ぶ鳥を落とすような勢いでメンバーを増やし、約900万人のユーザーを集めていた頃です。総務省も、地域SNSが行政への住民参加や防災情報の共有に有効かどうかなど、実証実験を行っていました。

折しも、誰でも無料で多機能のSNSを組み立てられるオープンPNE（ピーネ）がフリーソフトとしてデビューしたのも、利用者増加の火種になりました。当協会がカスタマイズし『どっとねっと』という独自サイト（図1）を本格的にスタートさせたのが18年9月でしたが、平成22年になると全国には500前後のSNSが立ち上がっていたとされます。『どっとねっと』は

口コミを中心に少しずつメンバーを増やし、20年3月末で参加者が約300名（最大500名となった）を数え、多い日は800アクセス、多い月は9,000アクセスを数えるなど、少人数の割には上昇気流に乗るような勢いもありました。図2は当時のアクセス数の日別変動で、ニュースや書き込みに敏感に反応していたのがわかります。

このようなねらいと背景のもとで続いてきた『どっとねっと』でしたが、今年9月で10周年を迎え、社会実験の目的はほぼ達成したとみて終了しました。今は、フェイスブックの中に同名のグループを作って同窓生のような交流が続いています。

実験の成果

この社会実験は、平成20年と23年に、経過と書き込みを分析し、地域SNSがコミュニケーションにどう役立っているのかという観点で総括を行いました。また、フォーラムを2回、座談会を3回実施し、折々に社会的背景とニーズについて学識経験者とともに検討を行いながら、「開発こうほう」と当協会ホームページで発信もしてきました。

社会実験の結果はどうだったのでしょうか。第1は、「日記」と「コミュニティ（テーマごとのグループ）」

*1 ソーシャル・キャピタル
社会関係資本。社会・地域における人々の信頼関係や結びつきを表す概念。

を主体としたシンプルな地域SNSでも、交流、情報発信に極めて有効だということがわかりました。第2には、地域課題に向き合ったディスカッションサイトとして十分機能することもわかりました。特に『どっとねっと』の場合は、行政とは無関係の市民、住民レベルの自由で自律的な試みだったために、固定したテーマを与えられて意見を述べるのではなく、その時々ニュースや地域と個人のトピックをネタにした自由な日記に反応したものでした。

これに付随し、ディスカッションサイトも兼ねたSNSは、当然の成り行きとして集合知を形成するようになります。つまり、地域課題はもとより、日本の立ち位置のようなレベルまで、真摯にディスカッションをする場がしばしば現れたのです。多少ヒートアップしても、匿名を許した登録にもかかわらず「2チャンネル」のように炎上したり荒れることもなく推移しました。熟議もあり内容が深かったのです。

運営上の特徴

予想以上に活発に運営することができた理由として、SNSの参加の仕方や参加者の特徴、コミュニティのでき方について「口コミ先行」「高い平均年齢」「時々のオフラインの集い（オフ会）」など、いくつかの特徴が挙げられます。

- ① 口コミ優先…参加者はほとんど口コミで広がっていった。「開発こうほう」による広報でも急激に登録者は増えたが、残った人はゼロだった。

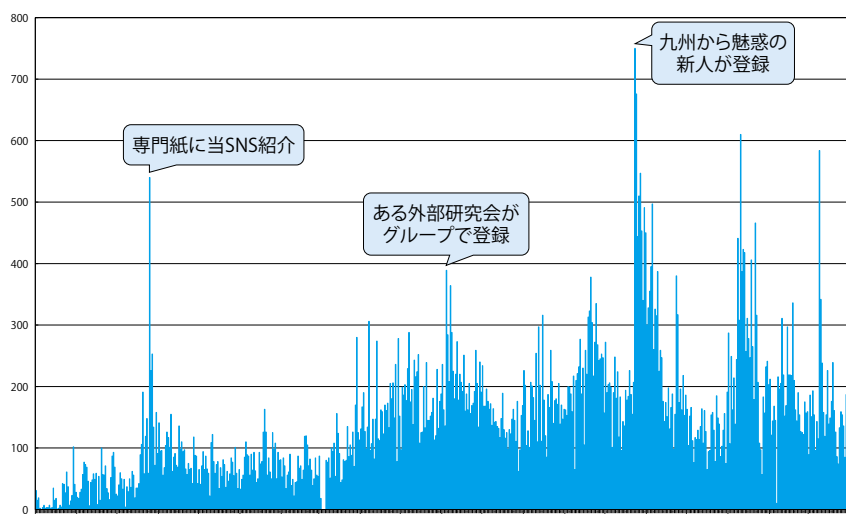


図2 日別アクセス数の変動（平成21年から22年にかけて）

- ② 高い平均年齢…アクティブライターの平均年齢が平成20年当時で55歳程度だった。この手の参加者としてはかなり高齢だとの評価だった。節度ある書き込みが行われる基盤である反面、若い世代が入りにくい側面もあっただろう。
- ③ 「時々のオフラインの集い（オフ会）」…インターネット上のSNS（オンライン）による交信のほかに、不定期的に直接顔を合わす懇親会が自然発生的に催された。したがって、匿名で登録はしたものの、実際上は実名での付き合いがあった。

以上①②③の要件が重なって、落ち着きのある荒れないネット環境が、10年の長きにわたって維持されたものと考えられます。

もう一つの幸運

ディスカッションサイトとして、地域資源活用や日常の食べ物論議、花鳥風月観察日記などのほかに、「グローバル化する世界と北海道」「捕鯨問題にみるジャーナリズムの役割」「アルプ^{*2}というコモンズ^{*3}」「われわれはどこへ行くのか」「砂川神社訴訟」などというネット議論を延々と展開してきたことも特筆されます。関心のある人が相互に書き込みして、あとは議論を見守るだけで終わるケースももちろん多いのですが、その内容は驚くほど深く時代を先取りした、マスコミの論評などでは見られないものも多かったのです。形而上^{けいじじょう}の話を恐れないのが『どっとねっと』の特徴だと看破した人、深いエピソードがその辺に転がっているのがすごい、と感想を述べた人もいたほどです。

なぜでしょうか。その大きな背景に、数十年ドイツとスイスで研究活動を行いジャーナリストとして暮らしたのち、東京の大学で教壇に立っていた元大学教授の存在と、英国の日常生活のなかから寄稿する女性の存在がありました。お二人のおかげで、北海道と日本の出来事や問題を、グローバルな位置づけで緊張感を伴ってとらえ直すことができたのです。クジラ問題で日本

*2 アルプ
アルプス山脈中腹の草原地帯。

*3 コモンズ
共有地、公有地。所有権が特定の個人ではなく共同体や社会全体に属する資源。入会地など。

がバッシングを受けていたころの「クジラのコミュニティ」の言葉の往来は圧巻だったと思います。欧米の報道がほぼリアルタイムで紹介され、宗教社会学の視点で問題がひも解かれていったのです。このお二人は北海道出身で、なにか北海道発の参加型SNSはないかと別々に探していて『どっとねっと』を見つけたもので、積極的なネット交流人口です。いかにもこういう時代らしいのですが、大所帯ならここまで発展しなかったでしょう。

これからSNSはどう変わるか

社会学や地域政策等の分野で、ソーシャル・キャピタルの代表的テキストと目される『孤独なボウリング』の著者ロバート・パットナムは、ソーシャル・キャピタルとインターネットの位置づけと可能性について次のように述べています。

「…最も重要な問題は、インターネットが人々に対して何を行うかではなく、人々がインターネットを使って何をするか、である。いかにすれば、コンピュータ・コミュニケーションのもつ巨大な可能性を用いて、社会関係資本への投資をより生産的なものにできるだろうか。…今のところの結論としては、インターネットが、伝統的な形態の社会関係資本における低下を自動的に補うということはないが、その可能性は十分にある」。

現実の社会もパットナムのこの見通しのとおりに動いているように見えます。現在のSNS(フェイスブック、ツイッター、ラインやインスタグラム(Instagram))などがインターネット・コミュニケーションのうちのどれくらいのシェアを持つのか、手元にデータはありませんが、インターネットによる交流がmixiなどいわゆる地域SNSから移ろいかつ多様化してきたように、あらたなツールを求めて今後もさまよう可能性は十分にあります。

しかし、フェイスブック等の利用を経てわかってきたことは、ネットワークのツールがあまりに多様化してネットワークそのものが崩壊する状況であり、そうして浮かび上がってくるのが基礎ツールとしてのeメールと、それを用いたメーリングリスト、さらに伝統的

なホームページやブログです。それらが最も長く生き延びるインターネットツールのように動いています。

見方を変えれば、ツールそのものが、日記とネットコミュニティを作るmixiから、一言つぶやきのツイッター、会話のライン、画像のインスタグラムなど目的によって進化しニーズも分散する以上、初期の地域SNSのようにみんなが集うプラットホームは望めなくなります。これからは、コンセプトや内容、イメージなのか、ディスカッションサイトなのか、日常のつぶやきなのか、リアルタイムの情報なのか、などの多様さに応じてホームページやブログ、フェースブックなど各種SNS、そしてもっとも基本的なeメールを駆使することになるのは目に見えています。インターネットの効用を積極的に受けるとすれば、それらを選択し使い切るしかありませんが、過剰な選択は疲れます。ネットワークにはやはり限界があります。9月末に行った最後の座談会では、10年続いた手応えのあるネットワークを懐かしむ声と同時に、もっと発展的な方向もありえたという反省も出され、様々な可能性をもったSNSらしい締めくくりになりました。

また今から数カ月前になりますが、『どっとねっと』を閉じるにあたって何か思い出に残る華々しいことをやろうという話になり、AKB48の「恋チュン・どっとねっとバージョン」を各地で録画して編集しようと相成りました。企画書もできて、ダンス練習用のミラービデオも準備し、さあやるぞと声だけはかかりましたが、ついに踊った人は現れませんでした。道内各地はもとより、九州、東海、関東、英国など、中高年が不器用に踊る姿にウルウルしたかったのですが、かないませんでした。人生は一期一会、返すがえすも残念ではありませんが、年相応と言えなくもありません。

参考

- 北海道の地域SNS実験サイト“どっとねっと”の軌跡
～手応え豊かなコミュニティ創造のために～
平成20年5月 財北海道開発協会
- 地域SNSフォーラム 地域SNSは「地域力」に貢献できるか
～北海道SNS「どっとねっと」の実験を踏まえて
平成21年 開発こうほう 10月号
- 北海道の地域SNS実験サイト“どっとねっと”の軌跡Ⅱ
“どっとねっと”は「つながり」と「集合知」を形成できたのか
平成23年7月 財北海道開発協会